

否定構造と歴史的変化

—主要部と否定極性表現を中心に—

John Whitman

コーネル大学

1. はじめに

否定の文法において、現代日本語は言語類型論的に特異な言語ではない。文否定を表す形態素は必ず文末に現れるが、これは主要部後位言語によく見られる特徴である。¹

- (1) a. もう二度とこの家に来ない。 (断定の否定)
- b. もう二度とこの家に来るまい。 (推量の否定)
- c. もう二度とこの家に来るな。 (禁止)

現代日本語の否定極性項目 (negative polarity items) も類型論的によく見られるパターンを示す。否定極性項目は不定代名詞 (「何」「誰」「どこ」など) と尺度的フォーカス (scalar focus) を表す副助詞「も」の組み合わせからなる (2)。

- (2) 彼は何も言わない。

このパターンは東北アジア言語に広く分布している (3)。

¹ 主要部後位言語では否定の形態素が普遍的に文末に来ると主張する研究者さえいる。Lehman (1978: 48) は “Verbal modifiers like those for negation, causation, and reflexive or reciprocal are placed after verb roots in OV languages and before verb roots in VO languages” と主張しているが、第2節で説明するように、この主張は正確ではない。 □

(3) a. 韓国語

Ku nun amu kes to malhaci anh-nun-ta.

彼 主題 何 事 も 言う 否定-現在-断定

「彼は何も言わない。」

b. 中国語

Tā shénme yě bù shuō.

彼 何 も 否定 言う

「彼は何も言わない。」

文否定が文末に限られることと否定極性項目が「不定代名詞+モ」からなることは現代日本語の特徴として注目されてきたが、日本語史の観点から見れば、どちらも日本祖語の特徴ではなかった可能性が高い。上代と中古日本語には否定の形態素が動詞の前に来る構文が禁止文に見られる。

(4) 心在如 莫思 吾背子 (万葉集 4, 538)

kokoro aru goto na omopi wa ga sekwo

心あるように 否定 思い 私の夫

「意味があるように思わないで、私の夫」

上代語の禁止文には否定の形態素「ナ」は動詞の直前に来る。中古語まで続くこの用法は禁止文にしか見られないが、上代語以前の日本語の内部再建を行うと、断定文の否定も主動詞の前に来たことが分かる(第2節)。日本語では否定が基本的に動詞の前に現れた可能性が強いのである。

不定代名詞+「モ」からなる否定極性項目は中世語になってからの現象である。上代日本語には「モノ」や「ヒト」のような一般名詞が否定極性項目の役割を果たした。

(5) 伊敏能伊母尔 毛乃伊波受伎尔弓 (万葉集 14, 3481)

ipyē no imo ni mono ip-azu ki-ni-te

家の妹に もの 言わず 来-完了-て

「家の妻に何も言わないで来てしまって」

(6) 吾戀流 千重乃一重母 人不令知

(万葉集 13, 3272)

□

□

A ga kwopuru ti pye no pito pye mo pito sire-zu
 私の恋う 千分の一分も 人で知られ-ず
 「私が恋悩む千分の一も誰にも知られないで」

(5), (6) と似たような否定極性項目表現は現代日本語にも英語にも存在する。(7), (8) がその例である。

- (7) a. 妻に一言いわなかった
 b. 妻にハガキ一枚送らなかった。
 (8) a. I didn't say a thing/a word to my wife.
 b. I didn't send my wife a postcard. (didn't にストレスを置かず, didn't から postcard の第一音節まで語音基本頻率 F0 を押さえたイントネーションで)

Kataoka (2008) は否定文においては (7b) の「ハガキ一枚」のような表現は否定の作用域内に解釈される存在量詞, つまり否定極性項目であるという。中世語以降, 現代日本語で見られる不定詞+「モ」のパターンが現れて, (7), (8) の否定極性項目と共存するようになった。

ある言語の史的変化において, 語順など, 類型論的特徴が大きく変わることがある。そのような現象が日本語の否定の文法にも起きた, というのが本稿の一つの主張である。具体的にいうと, 日本祖語には, 否定を含めて, いくつかの機能範疇が主要部前位であったが, これらの範疇は現代日本語では主要部後位になっている。2節では, 主要部前位性が主要部後位性へ変化する過程を考察する。

本稿のもう一つのテーマは否定極性項目の史的発現である。上代・中古日本語では, 否定極性項目は (5), (6) で見たような一般不定名詞表現に限られていた。3節では, 中世後半から, 疑問詞+「モ」, つまり現代日本語で見られる (2) のようなパターンが副詞節から再分析された過程を考察する。

2. 日本祖語の主要部前位性と否定の位置

Whitman (2005) では, 上代日本語には, 禁止文における否定のほかに, 〇 アスペクトとモダリティーを表す助動詞が主動詞の前に来る現象を指摘し 〇

た. 本節では, その3種類の主要部前位構造について考察する.

2.1. 継続相の接頭辞「アリ-」

アスペクトの場合には, 継続を表す「アリ-」が主動詞の直前に来る.

- (9) 由久敵奈久 安里和多流登毛 保等登藝須

(万葉集 18, 4090)

Yukupye naku ari+wataru to mo pototogisu

行方 なく アリ+渡るとも ホトトギス

奈枳之和多良婆 可久夜思努波牟

naki si wataraba kaku ya sinwopamu

泣き Foc 渡れば こう Q 偲ぶだろう

「(私が)行方なく(人生を)過ごし続けてもほととぎすが泣いて過ぎたらこうして慕うだろうか」

- (10) 近江之海 泊八十有 八十嶋之 (万葉集 13, 3239)

Apumi no umi tomari yaswo ari yaswo sima no

近江 の 海 港 80 ある 80 島 の

嶋之崎邪伎 安利立有 花橘乎

sima no sakizaki ari+tat-(y)eri panatatibana wo

島 の 崎々 アリ+立っている花橘を

末枝尔 毛知引懸

potu ye ni moti piki kake

最上の枝に餅引きかけ

「近江の海には港が数多くある. 数多い島の崎ごとに立ち並んでいる花橘に上の枝にとりもちを付けて」

「万葉集」には主動詞の直前に来る「アリ-」が39例ある. 後続する主動詞は, 上の「渡る」(3例)「立つ」(2例)のほか, 「通ふ」(18例)「待つ」(8例)「(た)もとほる(廻る)」(3例)「慰む」(2例)などである. 多くの先行研究ではこの主動詞の直前に来る「アリ-」を「継続」の接頭辞と分析する(澤瀉他(1967: 57)).

共時的に考えれば, 「アリ-」が必ず主動詞の直前に付き, 係助詞, 副助詞□や副詞が「アリ-」と主動詞の間にはいる例がないので, 接頭辞としての分□

析は妥当であろう。² 意味論的に考えれば、「継続」の意味は広く、研究者によって定義が異なるが、国語学では、菅野 (1960) が「継続」として捉え難い「アリ+V」の例が「万葉集」にあることを指摘している。例えば、次の例は「継続」ではなく「習慣」である (菅野 (1960: 53)).³

- (11) 弥年乃波尔 春花之 繁盛尔 秋葉乃
(万葉集 19, 4187)

iya tosi no pa ni paru pana no sakimori ni aki no pa no

一層年ごとに 春花の咲き盛りに 秋の葉の

黄色時尔 安里我欲比 見都追思努波米

momitamu toki ni ari+gaywopi mi tutu sinwopame

紅葉する時に アリ+通い 見て 賞味しよう

「なお毎年春の花の咲き盛りに、秋の葉の紅葉する時に必ず通って見ては覚でしょう」

菅野が指摘するように、(11) の「アリ+通ふ」は「続いて通う」というより、毎年春と秋に習慣的に通うという意味である。この場合の「アリ-」はアスペクトとしては習慣相 (habitual aspect) である。(10) の「アリ+立てり」も、1本の橘の木が継続的に立っているという意味ではない。島の岬ごとに必ず1本の橘の木が立っているという意味で、「橘」の複数を前提にする「反復相」(iterative aspect) である。このほかに、菅野は「アリ+動詞」に「状態相」の意味を示す例もあるという。

「継続相」「習慣相」「反復相」「状態相」は一般的に「未完了相」(imperfective aspect) という範疇に含まれる (Comrie (1976: 25))。これらのほかに、「進行相」(progressive aspect) も一般的に未完了相に含まれるが、「アリ+動詞」に「進行」の意味を示す例はない。言語類型論的に見れば、「進行」は未完了相の中心機能なのに対して、「習慣相」や「反復相」

² 「あり+通ふ」の場合に、「通ふ」の第1音節に「ありがよふ」と、連濁が見られることは接頭辞の分析を裏付けるもう一つの実事である。

³ 「継続形」(continuative または continuous) を「進行形」と同じアスペクトの範疇と見る研究者が多い (Payne (1967: 240))。Comrie (1976: 25) の部類では、「継続」(continuous) は未完了 (imperfective) の下位範疇であり、「進行」(progressive) が「継続」という範疇の中に含まれる。 □

はいわば未完了相の周辺的 (peripheral) な機能である。「アリ-」には未完了相の周辺的な機能はあるが、中心的な「進行」の機能はないのである。

上代日本語の Aspekte 語尾 *-yeri* (-エリ) には進行相の意味はある。⁴ 伝統文法では *-yeri* (-エリ) は「完了」と呼ばれるが、Watanabe (2003, 2008) は上代語の *-yeri* を未完了 (imperfective) と分析して、その機能には、進行、結果 (resultative)、状態 (stative)、と習慣 (habitual) があるという。Watanabe (2008: 84) が指摘するように、これらは未完了相の代表的な機能である。状態と習慣は接頭辞「アリ-」と重なるので、接頭辞「アリ-」と接尾辞 *-yeri* (<*-i+ari*) の関係が当然問題となる。

(10) の「アリ+立てり」が接頭辞「アリ-」と助動詞 (接尾辞) *-yeri* が共起する例である。この例では、「アリ-」が反復相 (岬ごとに) を表し、*-yeri* が進行相を表している。つまり *-yeri* は未完了相の中心的な機能 (進行) を示し、「アリ-」は周辺的な機能 (反復) を示す。歴史言語学には、二つの形態素が重なった用法を示す場合に、どちらが通時的に古いかを判別する原理がある。それは、ポーランドの言語学者イェジ・クリウオヴィチ (Jerzy Kuryłowicz) が提案した「類推的变化の第4法則」である (Kuryłowicz (1947))。クリウオヴィチの第4法則によると、新しい言語形式が生じる場合、その新しい形式が一次的な機能を取り、古い形式が二次的な機能を果たすようになる (when a new linguistic form is innovated, the new form takes on the primary function, while the older form retains secondary functions).⁵ 「アリ-」と *-yeri* を比較すると、*-yeri* のほうが、一次的、中

⁴ 古代日本語の *-yeri* (-エリ) は学校文法では「—り」と呼ばれ、動詞の命令形を受けると教えられている。この説が全く間違っていることは国語学者のなかで半世紀以上前から知られている。四段動詞の命令形語尾は乙類 *-e* あるが、問題の助動詞は甲類 *-ye* に付き *-yeri* という形になる。例えば「待つ」の命令形は *sake* であるが、現代語の「—ている」という意味の助動詞 (語尾) は *sak-eri* ではなく *sak-yeri* である。一般的に認められているように、*-yeri* の起源は動詞の連用形 *-i+* 存在動詞「アリ」である。上で述べているように、通時的に「アリ」から派生された点においては、*-yeri* は接頭辞の「アリ」と非常によく似ている。

⁵ 英語の *elder* と *older* がクリウオヴィチの第4法則の例としてよく取り上げられる。*Elder* は古い形式、*older* は新しい形式である。*older* が生じてから、そちらの方が比較形の一次的意味を表すようになって、*elder* は「長老」とか「兄」のような、より意味論的に
□ 狭い、二次的な意味のみ表すようになった。 □

心的な機能である「進行」を表し、接頭辞「アリ-」はより二次的、より周辺の機能を表すことが分かる。したがって、クリウオヴィチの第4法則によれば、接頭辞の「アリ-」が助動詞の -yeri より古い可能性が高い。とすると、「未完了」のアスペクトを表すのに上代日本語では接頭辞「アリ-」と語尾 -yeri が共存するが、より早い段階では、「アリ-」が未完了の形態素であり、-yeri が後から生じたという結論に達する。起源的には、「アリ-」は主動詞の前に来る、主要部前位性を示す範疇なのである。

2.2. 可能の助動詞「エ」

上代日本語では、「可能」を表す形態素「エ」も主動詞の前に来る。

- (12) 旅宿得為也 長此夜乎 (万葉集 12, 3152)
 tabi ne e seme ya nagaki kono ywo.
 旅寝年 可能 する か 長い この 夜
 「旅寝ができるものか、長いこの夜を」

伝統文法では、この「エ」は副詞と分類され、下二段動詞「得」(終止形「ウ」・連用形「エ」・連体形「ウル」)に由来するといわれる(澤瀉他(1967: 139))。しかし他の副詞と違って、「エ」は動詞直前の位置に限られる。「アリ-」と違って、助詞「モ」が「エ」と主動詞の間に入る例はあるが、それ以外は間に入るものはない。

- (13) 故敷等伊布波 衣毛名豆氣多理 (万葉集 18, 4078)
 kwopu to ipu pa e mo naduketari
 恋う というは 可能 も 名付けた
 伊布須敷能 多豆伎母奈吉波 安我未奈里家利。
 ipu subye no taduki mo naki pa a ga mwi narikyeri
 言うすべの 手がかりもないは私の身だった
 「恋するというのは名付けることもできた。言いようの手がかりがないのは私のことだった。」

古典文学鑑賞の流れでは、主動詞の直前に現れる「エ」を「よく...できる」と解釈することが多い。これは、平安時代に入って、肯定文における「エ」□の用法が廃ってしまって、漢文訓読文では漢語の可能の助動詞「能」と「得」□

を「ヨク」と訳する習わしのなごりである。このような漢文訓読法に影響され、小島他 (1996: 249) は上の歌に次の現代語訳を与える。

- (14) 「恋とはよくも名付けたもの 　　どう言えばよいか分からぬとは
この私のことです」

「恋とはよくも名付けたもの」という現代語では、歌の意味がぼやけてしまう。前の2句と後の3句の意味的關係がはっきりしない。この歌の語り手の主張は、「恋する」というものには、名前を付けることができ、その名前は何かの事かという、それは、何も言うすべのない自分だ、ということである。この場合の「エ」はほぼ現代日本語の「できる」と同じように解釈すればよいだろう。

中古語になると、「エ」は否定文に限られるが、上代語にはむしろ肯定文における例が多い。更に2例を見よう。

- (15) 彦星之 河瀬渡 左小舟乃 (万葉集 10, 2091)
pikwoposi no kapase wo wataru sa-wobune no
彦星 の 河瀬を渡たる 接頭辞-小船の
得行而將泊 河津石所念
e yukite patemu kapadu si omopoyu
可能 行きて泊まるだろう 川津 フォカス思われる
「彦星が川瀬を渡る船が行って着く(ことができた)だろう川津が
思い浮かぶ。」
- (16) 面忘 太尔毛得為也登... 戀云奴 (万葉集 11, 2574)
omo wasure dani mo e su ya to kwopi to ipu yatukwo
顔忘れ だけでも 可能 するかと 恋というやつ
「顔を忘れることだけでもできるかと... 恋というやつ」

(16) も現代語の「できる」、つまり「能力」という意味であるが、(15) は少し違う。この歌は無性物(彦星の船)が天川の彼岸に着いた出来事を指している。現代日本語では、無性物主語が能力表現「*電車が着けた」「*本が箱に入れた(はいれた)」を取ることはできない。なぜ彦星の船が「着くことができただろう」と、「可能」と「推量」がこの歌で強調されているのか。『万葉集』2091 は第10巻の、七夕伝説について歌われる一連の歌の一首であ□

る。前の歌(2090)の結句は「天人の 妻問ふたぞ 我も偲はむ」となっている。同じように、2091でも「さ小舟の え行きて泊てむ 川津し思ほゆ」と、歌の語り手が、織女星と牽牛星が逢い引きする場面を想像しようとしている。この背景を考えると、2091の可能表現「エ」は、単なる「能力」ではなく、「認識的可能性」(epistemic potential)の解釈がより適切であろう。想像の対象である逢い引きのシーンを描写して、認識的可能「エ」と完了「泊て」と推量「泊てむ」を使った表現は英語の could have, might have のような認識的可能相とよく似た表現である。

さて、ここまでの議論で上代語における「エ」は主動詞の直前に来る可能相の形態素であることが分かった。上で指摘したように、中古日本語(平安時代)になると、「エ」は否定文に限られるようになる。すでに平安初期の散文資料『東大寺諷誦文稿』(830年ごろ推定)には「エ+否定」の用法しか見られない。

- (17) 瑕キス 疵ツツミ 附身時ニハ妻子モ扶衣タス (諷誦文稿 181)
「キズ・ツツミの身につく時には妻子もえ助けず」

Kato (2002, 2003, 2009) は中古語における「エ」を詳しく記述している。中世語に入ると、「エ」が否定文に限られるようになるという変化を含めて、四つ程著しい変化が見られる。第1の変化は否定文に限られることである。第2の変化は、Kato が指摘するように、句レベルの範疇が「エ」と主動詞の間に入るようになることである。

- (18) a. あり所はききけれどえ [物も] いはで (古今集 15, 747)
「ありどころは聞いたけれど [何も] 言わないで」
b. はらからなどもえいとかうまではおはせぬわざぞ
(源氏 早蕨)
「兄弟なども、とてもこうまではいらっしやれないことだ」

このような現象は上代語の資料には見られない。

第3の変化として、「エ」は否定の助動詞「ズ」だけではなく、否定的推量の助動詞「マジ」(上代語では「マシジ」と共起するようになる。

- (19) 女のえうまじかりけるを (伊勢物語 6)
□ 「自分のものにできなかったらう女」 □

第4の変化も Kato (2009) が指摘する現象である。否定の助動詞を省略して、「エ」だけで否定の意味を表す用法が平安時代の資料に見られる。

- (20) 「さらなる事どもはえなむ」とばかり (源氏 須磨)
 「『言うまでもないことには(話すことが)できは(しない)』とばかり」

(20) のような省略現象も上代語の資料では見られない。

これら四つの通時的变化では、特に否定文に限られるという第1の変化によって、「エ」が否定の助動詞と呼応関係を持つようになったことがわかる。Kato (2009) は「エ」を含む否定文に次のような構造を与えている。

- (21) $[_{ZP} e [_{ZP} + neg [_{VP} \dots [_{VP} V]]] zu]$ (=Kato (2009) の (34))

(21) のような構造は (20) の省略否定文にも適合する。この環境では否定の助動詞を含む最大投射 (maximal projection) が省略されたという分析が成り立つのである。

- (22) $[_{FocP} \text{エ} + \text{ナム} [_{NegP} [_{VP} \dots [_{VP} V]]] zu]$

この省略現象は「エ」に係助詞「なむ」や「こそ」が付く場合にのみ起こるようなので、「エ」+係助詞が FocusP の指定部にあり、NegP が省略されるという (22) の分析が妥当であろう。係助詞が付かない場合には、「エ」が NegP の指定部で生成されることにより、「エ」と否定の呼応が説明される (Kato (2003) 参照).⁶

- (23) $[_{NegP} \text{エ} [_{VP} \dots [_{VP} V]]] zu]$

(23) の分析では、中世時代における「エ」と否定句 (NegP) の主要部

⁶ 本研究の論議と直接の関係はないが、Kato (2009) には、中世日本語の「エ」に関してもうひとつ極めて重要な観察がある。それは、格助詞(「ノ」「カ」「ヲ」など)は「エ」と主動詞との間に入ることはない、という観察である。このほかに、1語+「モ」からなる、(18)の「物も」のような不定名詞+「モ」が「エ」と主動詞の間に入る例はあるが、2語以上からなる句レベルの項 (phrasal argument) が入ることはないようである。この事実から、句レベルの項への構造格は vP 以外に付与されたことが伺える (Yanagida (2006), 柳田 (2007), Yanagida and Whitman (2009) 参照)。 □

(21) では「ズ」)との関係を指定部・主要部一致 (Spec-Head Agreement) と見なすことができる。否定句における指定部・主要部一致の研究としては Haegemann and Zanuttini (1991) があるが、Haegemann and Zanuttini は主に否定極性項目と否定句の主要部の一致について考察している。否定と呼応を示す法的 (モーダル) 副詞としては、英語の *hardly* があげられる。中古日本語の「エ」と英語の *hardly* の間にいくつかの類似点があるので、ここで簡単に述べることにする。

Horn (2000, 2002) では *hardly* を近似的副詞 *approximative adverb* として分析している。近似的副詞の *hardly* や *barely* は単独で、つまり否定の *not* などと共起しないで否定極性項目を許容する。

- (24) a. I *hardly/barely* brought any money.
b. *Barely/Hardly* anyone survived the accident.

Horn (2002: 164) が指摘するように、英米語では、否定呼応 (*negative concord*) を許容する話者は *hardly* と *not* が共起する文を許容する。Horn (2002) がいうように、このような話者にとって次の (25b) は標準的な (a) と同じ意味である。

- (25) a. I like *hardly* anyone here. (= 'I like almost no one here')
b. %I don't like *hardly* anyone here. (= (a))

また、*hardly* と *not* が共起する、また別な用法が英米口語にある。

- (26) a. I don't *hardly* like anyone here.
b. I don't *hardly* know.
c. We sloshed you with Martinis, an 'it wasn't' *ardly* fair.

(26c) はラドヤード・キップリングの名詩「Fuzzy Wuzzy」(Kipling, 1890) の1句である。この場合の *hardly* は近似的副詞の場合と意味が違う。近似的副詞ならば (27) のようになる。

- (27) It was *hardly* fair. (=It was almost not fair)

(27) では *hardly fair* の意味はフェアでないことに近いがフェアである、つまり近似的副詞の解釈である。キップリングの詩 (26c) の '*ardly* fair' の意

味は全然フェアではない、つまり全面否定である。同じように、(26a, b) の *hardly* は近似的ではなく全面否定の意味である。(26a) は (25) と違って「ここに誰ひとり好きな人がいない」という意味である。(26b) は *I don't really know* 「実は知らない」とほぼ同じ意味で、近似的用法の *I hardly know* 「知らないに近い」と違ってやはり全面否定である。(26) の *hardly* は *really* などと同じように、命題に対する話者のモーダルの判断を表す認識的副詞 (epistemic adverb) である。近似的副詞の *hardly* と違って、認識的副詞の *hardly* は義務的に否定と呼応するが、その呼応の形式が目目値する。(26) の例文における否定表現はすべて省略形の *don't*, *wasn't* であるが、それらを非省略形に変えると、非文法的になる。

- (28) a. **I do not hardly like anyone here.*
 b. **I do not hardly know.*
 c. **It was not hardly fair.*

(28) の非文性はただ口語対書き言葉、言語使用域の問題ではなく、どう捉えてもまったく非文法的である。この事実は認識的副詞の *hardly* と否定の呼応で説明できる。Pollock (1989) が指摘するように、英語の *not* は NegP の指定部にあるが、省略形の *n't* は主要部であり、助動詞や動詞の *be* と一緒に T まで繰り上がる。認識的副詞 *hardly* が呼応するのは、NegP の主要部である *n't* である。つまり認識的副詞の *hardly* は *n't* と指定部・主要部一致をなしているのである。構造は (29) に示すとおりである。

- (29) [_{NegP} *hardly* [_{Neg'} *n't* [_{VP} ... [_{VP} V]]]]

非省略形の *not* も NegP の指定部に生成されるので、認識的副詞の *hardly* と同時に起こらず、*hardly* と *not* は相補的分布にあるわけである。

以上、英語の話が長くなったが、注目すべきところは、(29) の構造と中世日本語の「エ…ズ」の構造 (23) の平行性である。中古日本語の「エ」も認識的副詞の *hardly* もモダリティを表す副詞であり、どちらも義務的に否定と呼応する。通時的に見れば、どちらももともとは、モーダルな概念 (可能、近似性) を表す意味であったが、否定と義務的に呼応するようになってから、否定の「強調」または話者の命題態度を表すようになったのである。

□ 最後に、「エ」をめぐる上代語と中世語の相違をいかに説明するかという □

問題を取り上げる。Kato (2002, 2003, 2009) の研究によって、中世語の「エ」は指定部にあることが分かった。しかし中古語と違って、上代語の「エ」は否定との呼応を示さないし、統語的位置が固定している。これらは指定部ではなく、主要部の特徴である。上代語から中古語への「エ」のこのような変化は、(30) のような、主要部から指定部への再分析として説明することができる。

- (30) a. 上代日本語 [ModP [Mod エ] [NegP V [Neg zu]]]
- ↓ ↓ ↓
- b. 中古日本語 [NegP エ [Neg' VP [Neg zu]]]

(30) の再分析により、中古日本語の「エ...ズ」構文と上代語の「エ」の間の、上で記述した四つの相違点を説明することができる。第1に、中古語に見られる「エ」と否定の呼応は、(30b) の構造では「エ」と [Neg -zu] が指定部・主要部一致関係にあることで説明できる。第2に、中古語では句レベルの範疇が「エ」と主動詞の間に入ることができる。一方、主要部前位構造を部分的に示した上代語では、動詞が「ズ」に付加して、残留部移動 (remnant movement) により動詞句全体がさらに構造的に高い位置に繰り上がる派生を示しているように思われる (Kayne (1994) 参照)。⁷ これらの主要部前位構造がなくなった中古語以後、残留部移動がなくなり、動詞句がそのまま「エ」と「ズ」の間にはいるようになる。第3に、「エ」が「マジ」など、「ズ」以外の否定要素と呼応するようになったのであるが、これは指定部・主要部一致の延長と見られることである。第4は「エ+コソ・ナム」の省略文に関して上に述べたように、これは NegP にあった「エ」が FocusP の指定部に上がってからの NegP の省略現象であり、構造的に英語の Sluicing (Ross (1969)) と同様の現象である。

(30) に示す再分析は、上代語から中古語にかけて、主要部前位構造が消失したことを示すと思われる。主要部前位構造の消失により当時の日本語の言語習得者は「エ」を主要部として習得せず、指定部として再分析したので

⁷ Kayne (1994) の反対称性理論によると、主要部後位構造を生成するには二つの派生法がある。一つは、動詞だけを上の主要部に付加させ、残留部の動詞句をさらに左へ繰り上げる派生である。もう一つは、動詞句全体を主要部の左へ繰り上げる派生である。それぞれ (30a), (30b) に対応する。

ある。

2.3. 禁止法の「ナ」

上の例(4)で見た禁止法の「ナ」は上代語には、「アリ」と「エ」と同じように、述語のすぐ前に来る。

- (31) a. 父母毛 表者 奈佐加利 (万葉集 5, 904)
 titi papa mo upe pa na sakari
 「お父さんお母さんもそばを離れないで」
- b. 安礼奈之等 奈和備 (万葉集 17, 3997)
 are nasi to na wabwi
 「私がいなくてかまわないで」
- c. 和我由恵尔 於毛比奈夜勢曾 (万葉集 15, 3586)
 wa ga yuwe ni omoi na yase so
 「私のために思い煩って痩せないで」

「エ」と違って、「ナ」と主動詞の間には「モ」さえない。「ナ」に後続する主動詞は普通連用形であるが、カ変動詞とサ変動詞は未然形である。主動詞の後に「ソ」(乙類 so) が付く例がやや多いが、中古語と違って、「ソ」は義務的ではない。

むしろ、山田(1954: 501)が指摘するように「コソ」(「来」の未然形+「ソ」)という形は存在しないので、「ソ」が付く用法は後からできた可能性もある。この用法において、カ変動詞の「コ」とサ変動詞の「セ」は伝統的に未然形と言われるが、「来」(コ)と「為」(セ)は動詞語幹だとも考えられる。

平安時代に入ると、前節の「エ」と同じように、禁止法の「ナ」の文法は大きく変わる。まず、Kato(2009)が指摘するように、中世語になると「ナ」と主動詞の間に別な語が入るようになる。

- (32) あだ人のまがきちかうな花うゑそ (拾遺集 7)
 「浮気人の籬近く花を植えないで」

Katoが指摘するように、句レベルの範疇が入る例もある。



- (33) ひが事なつねにの給そ (源氏 夕霧)
「疑わしいこといつも言わないで」

中世語になると、「ナ」と「ソ」の呼応は義務的になる。上代語と中世語の「ナ」の用法の相違点は「エ」とほぼ平行なのである。「ナ」は「ソ」と呼応関係を示すようになるとともに、指定部に位置が定まることによって、句レベルの範疇が「ナ」と動詞の間に入るようになる。中古語の「ナ…ソ」禁止文には次のような構造を与えることができる。

- (34) [NegP ナ [Neg' VP [Neg ソ]]]

この構造を導く歴史的過程を説明するには、多少の比較言語学的背景が必要である。Rivero (1994) と Rivero and Terzi (1995) の研究以来、命令文における命令形の動詞が Comp に繰り上がるという見方が生成文法では一般的になっている。具体的な根拠としては、フランス語などの命令文があげられる。フランス語では、命令文においては動詞が主語の前に来る。

- (35) [CP Lisez [TP vous le livre]]!
読め 君 定冠詞 本
「その本を読んでください。」

Rivero (1994) と Rivero and Terzi (1995) の説によると、命令文の Comp に [Imperative] (「命令」) の素性があり、命令文の動詞がその素性と照合するために Comp に上がるという。ところが、Rivero (1994) と Rivero and Terzi (1995) も指摘するように、多くの言語では、否定の形態素と動詞の命令形からなる禁止文は排除される。スペイン語がその例である。

- (36) a. ¡Lee el libro!
読め 定冠詞 本
「その本を読め。」
b. *¡No lee el libro!
否定 読め 定冠詞 本
「その本を読むな。」
c. ¡No leas el libro!
否定 読む(接続形) 定冠詞 本

□

□

「その本を読むな。」

(36a) は普通の命令文である。(36b) は否定の形態素 *no* と動詞の命令形からなる文であるが、スペイン語ではこの組み合わせは許容されない。その代わりに、動詞の接続形 (*subjunctive, subjuntivo*) と *no* の組み合わせ (36c) を使わなければならない。Rivero (1994) と Rivero and Terzi (1995) の結論は、禁止文 (つまり否定の命令文) では否定の形態素が命令形の動詞の繰り上げを妨げるので、命令形以外の形式が使われなければならない、ということである。

あまり注目されていないが、否定の標示と動詞の命令形が一緒に使われないという (36) で見たスペイン語の制約は、日本語にも当てはまる。例えば、日本語には文末に現れる禁止の形態素「ナ」がある (37a)。この用法はすでに上代語に見られ、本節で取り上げている「ナ+動詞」の禁止法と共存する。上代語では文末の「ナ」は動詞の終止形 (ラ変動詞の連体形) を受けたが、上代語から現代語にかけては、「ナ」が命令形を受ける用法 (37b) は存在しない。

- (37) a. その本を読むな。
b. *その本を読めな。

同じように、「ナ+動詞」の禁止法は動詞の連用形 (カ変、サ変の未然形) と呼応するが、この「ナ」も、命令形と共起することはない。この制約を、「命令否定制約」と呼ぶことにする。簡潔にいうと、否定文の命令法はあるが、命令文の否定法はない、という制約である。

Han (2001) は、この「命令否定制約」を意味論的に説明している。Han は、命令文における動詞が [Imperative] の Comp まで上がるという Rivero (1994) と Rivero and Terzi (1995) の主張を認めているが、禁止文においては、もし否定の形態素が動詞と共に Comp まであがると、否定 (Neg) が Comp にある命令 (Imp) の演算子より広い作用域をもつことになる。そうなると、禁止文の意味は「すること勿れ」、つまり動詞句+否定+命令という、意図された意味ではなく、「動詞句+命令+否定」という解釈になってしまう。「動詞句+命令+否定」という順序をあえて解釈すれば、「命令する行為はない」という、禁止とは異なる意味になってしまうのであ

る。

さて、上で見たように、日本語にも「命令否定制約」が適用されるようである。現代日本語に「*その本を読めな」という表現がないように、古代日本語にも「*本をな読め」という形はなかった。現代日本語の最も一般的な禁止法、「動詞+ないで」を考へても、否定語尾「-(ア)ナイ」に続く形は命令形ではなく、連用語尾「-デ」である。⁸ 現代、古代を問わず、日本語にも「動詞句+命令+否定」という形の表現はないのである。

この一般化は反対称性理論 (antisymmetry theory; Kayne (1994)) により説明される。同理論では禁止文の深層構造は普遍的に (38) のようになる。

(38) [CP Comp [NegP Neg [VP V-命令形]]]

Rivero (1994) などに従い、「V-命令形」が Comp まで上がらなければならないと想定する。「V-命令形」が Comp まで上がる方法としては、V が Neg に付加して、V-命令形+Neg となり、その全体が Comp に繰り上がるしかないが、その派生は Han (2001) の意味論的制約に違反するので、除外される。よって、(38) から文法的な表層構造を派生することは不可能なのである。したがって、「禁止」を表すのに (38) とは異なる構造が仮定されなければならない。日本語史を通して、「命令否定制約」を避けるために、三つの構造が使われている。一つは「動詞+否定+授与動詞」、つまり「本を読まないでくれ」などである。現代語の「本を読まないで」はこの同じ構造で、命令形の助動詞を省略した形だと思われる。このパターンに構造を与えると、反対称性理論では次のようになる。

(39) [CP [VP 本を読まないで] [C'くれ [Imp] [TP ...]]]

(39) の構造では、命令形である授与動詞「くれ」が Comp にあがる。否定「-(ア)ナイ」は授与動詞の補語 [VP 本を読まないで] の中に埋め込まれているので、否定が命令 [Imp] の作用域を超えるという問題は生じない。上代

⁸ 日本語史において、「動詞+否定+命令形」にもっとも近く見える用法は漢文訓読の「すること勿れ」という用法であるかもしれない。しかし中国語の禁止法の翻訳であるこの用法でも、形態素の順序は「動詞+命令+否定」ではなく、動詞(すること)+否定「勿」+命令「アレ」である。 □

語から現代語まで続いた禁止法「スルナ」にも (39) と似たような構造が与えられる。

(40) [CP [TP 本を読む] [NegP na [TP]]]

「スルナ」禁止法の特徴は、NegP が補語として TP を取ることである。TP なので、上代語では終止形、現代語では現在形 -(r)u と、主文同等の動詞語尾が現れる。命令形の動詞はないので、動詞が Comp に上がる必要はないが、反対称性理論によれば TP が「ナ」の左へ移動する。

最後に、(41) は上代語の「ナ... (ソ)」の構造である。

(41) a. [TP [NegP な [FP そ [vP 我が故に思ひ [V 瘦せ]]]]

(= 深層構造)

b. [TP [vP 我が故に思ひ t_V] [NegP な [FP 瘦せ+そ t_{vP}]]

(= (31c))

(41a) の深層構造では「ナ」が NegP の主要部であり、「ソ」は NegP 以下の機能範疇の主要部である。動詞は命令形ではないので、Comp まで上がる必要がない。(41b) に示す派生では、動詞「瘦せ」が機能範疇「ソ」に付加して、反対称性理論に従って vP の残りは更に左へ動く。上代語 (41) から中古語 (34) への変化は、前節の「エ」と同様、主要部前位性の消失により、「ナ」が主要部から指定部に再分析化された結果である。

この節を終えるにあたり、二つの指摘を加えておきたい。一つは言語類型論的事実に関する指摘である。主要部後位性の強い言語として日本語だけを考えると、否定、アスペクト、ムードの主要部だけが動詞の前に来る現象は珍しく思われるかもしれない。しかし、Dryer (1992) の研究によれば、否定の標示が主動詞の前に現れる言語は Dryer が調査した OV 言語の半分ぐらいある。Dryer (1992) はさらに否定標示がいつ動詞の前に現れ、いつ動詞の後に現れるかに関して、ある一般化があることを指摘した。否定標示がテンスや一致を示さない、屈折しない助詞 (uninflected particle) である場合、動詞の前に来ることが多い。否定標示がテンスや一致などの屈折を示す場合には、動詞の後に来る例がほとんどである。日本語も同じであり、「ナ... (ソ)」禁止法の「ナ」は屈折しないので、動詞の前に来るが、屈折する現代語の「-(ア)ナイ」は動詞の後に来る。Whitman (2005) は、上の一般化□

も反対称性理論で説明できることを以下のように指摘している。反対称性理論では、深層構造において動詞-否定-テンスの順序は (42) である。

(42) [TP Tense [NegP Neg [VP ... V ...]]]

動詞が Tense まで上がる場合には Neg が主要部であれば、動詞が Neg に付加して、動詞+Neg が一緒に Tense に繰り上がる派生しかない。反対称性理論では、これが日本語などの一般的な否定文、つまり屈折する否定標示の派生である。

(43) [TP yuk + ana + i [NegP tv+Neg [VP ... tv ...]]]

これに対して、否定標示が屈折しない場合が三つある。一つは、(41) の「ナ... (ソ)」のような禁止文である。この構造では動詞が T へ移動しないので、NegP の主要部である「ナ」はそのまま動詞の前に現れる。もう一つは、(40) の「スルナ」禁止文である。この場合には文全体が「ナ」の左へ動くので、屈折しない否定の助詞が文末に現れる。三つ目は、否定標示と動詞を含む NegP 全体が T の左へ移動する場合であるが、これは韓国語における動詞前否定構造の場合である (Whitman (2005))。

上の説明によって、何故上代日本語の禁止文に動詞の前に来る否定標示があったかがわかる。「ナ... (ソ)」禁止文において、動詞が T まで上がらないので、深層構造の「ナ」と動詞の相対順序が保たれる。しかし上代語以前の日本語において否定標示が動詞の前に来る構造は禁止文だけだったのかというところではなかったようである。このことは、上代語における否定語尾の活用を見ると分かる。

(44)	終止	未然	連用	連体	已然
a.	-(a)zu		-(a)zu		
b.	-(a)nu	-(a)na	-(a)ni	-(a)nu	-(a)ne

上代語の否定語尾には 2 系列があった。平安時代になると、この二つが合流して (44a) のように「ズ」が唯一の終止形と連用形となり、(44b) のように終止形「-(ア)ヌ」、未然形「-(ア)ナ」と連用形「-(ア)ニ」が完全に消えてしまう。上代語にはすでに終止形「-(ア)ヌ」の存在は疑わしく、連用形 □「-(ア)ニ」は特定の動詞に限られていた。 □

大野 (1953) が指摘したように, (44a) の「ズ」が (b) の, n で始まる系列と音韻的に異なるので, 起源を別にする可能性が高い. 大野の考えでは, 「ズ」は (44b) の終止形 $-(a)ni$ + サ変動詞 su の融合から生じたものであり, その融合でできた (44a) が古い形の (44b) をどんどん追い出したという. 上代語における濁音 (「ズ」の z など) は鼻音と一般子音の融合により生じた音素なので, 音韻的な妥当性はある. ただ, この融合過程に関わった否定標示は必ずしも (44b) の連用形 ni だったとは限らない. 鼻音音節末の $*(a)n$ だった可能性も考えられる.

大野の「-(ア)ズ」の起源説で分かることは, 上代語以前の日本語には, 禁止法以外の否定形にも主要部前位があった, ということである. 上代語の「-(ア)ズ」が $*(a)n(i) su$ からできたとすれば, もともと否定標示 ni が動詞 su の前に来たのである. ただし, 大野の起源説では, 何故 z 系列の否定語尾が終止形と連用形にのみ存在したかは説明されていない. ここで注目すべき事実は, (44b) の n 系列否定語尾が埋め込み文, つまり未然形, 連用形, 連体形, 已然形に限られ, それに対して, (44a) の z 系列が主文, つまり終止形文に多いことである (「-(ア)ズ」の連用形用法もあるが, これは終止形用法の延長とも考えられる). (43) で紹介した, 反対称性理論による機能範疇の配列をもう一度考えよう.

(45) [CP [TP [NegP Neg [VP ... V ...]]]]

未然形, 連用形, 連体形, 已然形はすべて埋め込み文, つまり CP における活用形である. それらの CP に現れる Comp は語尾であり, 動詞に支えられなければならないと想定すれば, それらの活用形に限って動詞が Comp まで上がらなければならない, ということになる. 已然形の仮定法「行かねば」を例にする.

- (46) a. [CP -ba [TP [NegP ane- [VP yuk-]]]] →
 b. [CP yuk + ane + ba [TP t_{yuk-ane-} [NegP t_{yukane-} [VP t_{yuk-}]]]]

一方, Comp を持たない終止形文には動詞が上がる必要がなかった. したがって, 上代語以前の日本語には禁止法だけではなく, 終止形文にも否定標示が動詞の前に来た可能性がある. 上代語の否定の終止形「-(ア)ズ」 $<*(a)n$ □ + su はその痕跡であるように思われる. □

3. 否定極性項目の発達

第1節で指摘したように、現代日本語で見られる疑問代名詞+「モ」からなる否定極性項目は中世以後初めて現れる現象である。『日葡辞書』(1603)には現代語とほぼ同じような用法が記述される。

- (47) Nanimo ... 否定動詞とともに何も～ないとか、一つも無いとか、を意味する。例, Nanimo nai. (何モ無イ) 何一つ無い。
(土井他 (1980: 448))

上代語には不定代名詞+「も」の否定極性項目は見当たらない。「何しかも」「何ぞも」「何かも」など、不定代名詞+係助詞+「も」というパターンは『万葉集』に見られるが、これらの表現は否定極性項目ではなく疑問代名詞である。

- (48) 何物乎鴨 不云言此跡 吾将竊食云奴
(万葉集 11, 2573)

nani wo ka mo ipazuteipisi to wa ga nusumapamu
何を Q も 言わなで言ったと私がおまかすだろう
「何をいったい言わないのに言ったと私がおまかすでしょうか」

ところが、量的不定詞「いくー」+「も」を含む表現はすでに上代にあった。Aldridge (2007) が指摘するように、「いくー... も」は文否定と共起する。

- (49) 佐祢斯欲能 伊久陀母阿羅祢婆 (万葉集 5, 804)
sa-nesi ywo no ikuda mo ar-an-e-ba
寝た夜 の いかほども有-否定-已然形-仮定
「(共に)寝た夜がいかほどもないのに」

『万葉集』には、「いくだも」「いくかも」(幾日も)「いくばくも」「いくらも」は否定文にしか現れないようなので、否定表現と見なせるかもしれない。⁹

⁹「万葉集」には「いくばくも」が3例、「いくかも」(幾日も)が2例、「いくだも」が3例、「いくらも」が1例ある。いずれも否定文にしか見られないが、仮名書きの例は804の「いくだも」と3962の「いくらも」のみである。 □

ただし、「いくー...も」は後代の「だれ・なにも...ない」のような否定極性項目とは意味論的に著しく異なっている。「だれ・なにも...ない」の意味は全面否定である。「日蒲辞書」の例「Nanimo nai」は次の(a)か(b)のいずれの形式化も考えられるが、いずれにしてもxに対応するものはひとつも存在しないという、全面否定の解釈になる。

- (50) a. $\forall(x) \sim [\text{exist}(x)]$
 b. $\sim \exists(x) [\text{exist}(x)]$

これに対して、(49)の「いくだも...ない」の解釈には「少しはあった」という含みがある。「いくー...も」と「だれ・なにも」の対立は現代語でも同じである。

- (51) a. 残品はいくらもない。(少しはある)
 b. 残品は何もない。(ひとつもない)

現代語の「いくらも」や上代語の「いくだも」は尺度的数量表現 scalar quantity expression であり、その意味は「ある不特定な大きい量」である。全称量詞(「全員」「全部」every, all)を尺度の最強(strongest)に位置づけられ、存在量詞(「だれか」「だれも」some)を尺度の最弱(weakest)に位置づけられるが、「いくらか」や「いくだも」「いくばくも」はその間にある。下記の図は Horn (2001: 237) に基づく。

	(52) 強	every/all	全部 なにも	no/none	
	↑	most/a majority	過半数 ほとんど	very few	↑
		half	半分	a minority/not half	
		very many	大多数		
		any amount of NP		いくらも	
		many	たくさん		
		several	いくつか		
	弱	some	なにか	not all	
		肯定		否定	

現代日本語の「いくらも」と英語の any amount of NP は形の上で否定極性□項目と似ているが、意味論的には否定極性項目ではない。どちらも全面否定□

ではなく、「ある不特定な大きい量」という意味を持っている。

- (53) a. She didn't drink any amount of tea. She drank 2 cups.
 b. She didn't drink any tea. #She drank 2 cups.
- (54) a. お茶はいくらも飲まなかった。2杯飲んだ。
 b. お茶はなにも飲まなかった。#2杯飲んだ。

(53b)と(54b)の続き She drank 2 cups「2杯飲んだ」には矛盾めいたひびきがあるが、(53a)と(54a)の場合には矛盾がない。後者の場合には、「2杯」が話者が想定した「ある不特定な大きい量」まで至らない限り、「いくらも飲まなかった」と「2杯飲んだ」は矛盾しないのである。

「いくらか」・any amount of NP のもうひとつの特徴は、肯定文に現れる場合の解釈である。¹⁰

- (55) a. I have drunk any amount of tea, but this tea is the best.
 b. *I have drunk any tea, but this tea is the best.
- (56) a. お茶はいくらも飲んだけれど、このお茶が一番だね。
 b. *お茶はなにも飲んだが、このお茶が一番だね。

(55b)と(56b)でわかるように、(55)と(56)は否定極性項目を許容する環境ではないが、「いくらか」・any amount of NPはこの環境で許容される。その意味が「ある不特定な大きい量」であるのに対して、英語の any と現代日本語の「だれ・なにも」が許容される肯定文では全称量詞(英語では自由選択 free choice の全称量詞)の意味になる。

- (57) a. Any tea would be fine.
 b. どのお茶も結構です。

(57a)の any tea の意味は「どの種類のお茶でも」である。すべての種類は結構で、結構でない種類はない、つまり全称量的な意味である。これに対して、(55a)と(56a)の意味は「どの量でも飲んだ」「すべての量を飲んだ」というような全称量的な解釈ではない。「たくさん飲んだが、その量は不特定

¹⁰ (56)の「いくらも」の意味論的解釈にかんする大変有益な助言を、坪本篤朗氏にいただいた。

である」といった解釈である。

英語の any amount の全称量的でない解釈は擬似部分冠詞構造 pseudo-partitive structure に限られる。この事実は次の例でわかる。

- (58) a. She drank [_{DP} any amount of [_{NP} tea]].
 (いくらも、たくさん飲んだ)
 b. She drank any tea. (どの種類でも飲んだ)
 c. She drank [_{DP} any [_{NP} box [_{PP} of [_{DP} the tea]]]].
 (その茶のどの箱も飲んだ)

擬似部分冠詞構造には右側の名詞 ((58a) では tea) が主要名詞である (Selkirk (1977)). この構造のなかでは any と度量表現 (measure expression) の amount が全称量詞の解釈を受けない。それに対して, (58c) の部分冠詞構造では box が主要名詞で, any が普通の全称量詞 (自由選択) の解釈を受ける。さらなる類型論的調査が必要であるが, 擬似部分冠詞構造に埋め込められた「最強」の尺度的数量表現でも, 全称量詞の解釈を受けない, という仮説が成り立つように考えられる。Watanabe (2006: 259-262) は現代日本語の次のような表現を擬似部分冠詞構造として分析している

- (59) [_{#P} [_{DP} どんぶり (に) 4 杯] [_{NP} ご飯]] を食べた。

(59) には「どんぶり 4 杯」は #P (Number Phrase) の指定部にある。この深層構造から数量詞遊離は可能である。

- (60) ご飯を (昨日) どんぶり (に) 4 杯食べた。
 (Watanabe (2006: 259, (26c)) 参照)

同じ構造を想定して尺度的数量表現を #P の指定部に入れることができる (61a)。そうすると (61b) が数量詞遊離で派生される。

- (61) a. [_{#P} [_{DP} いくらも] [_{NP} お茶]] を飲んだ。
 b. お茶を (いままで) いくらも飲んだ。

『万葉集』の例 (49) も, 「さ寝し夜」が主要名詞で, 「いくだも」が遊離された量詞として分析できる。(この例における「の」は所有表示ではなく, 述
 □語「あらねば」(已然形)の主語表示である。) □

- (62) (= (49)) [さ寝し夜の] [いくだも] あらねば (万葉集 5, 804)
 「(共に)寝た夜がいかほどもないのに」

このように捉えると、現代日本語の「いくらも」、上代日本語の「いくだも」「いくばくも」などに全称量詞の解釈がないのは、英語の any amount of NP と同様、擬似部分冠詞構造に埋め込められているからであるということが出来る。

以上の議論から、上代日本語には不定詞+「も」からなる否定極性項目はなかった、と結論づけることができる。「いくだも」「いくばくも」「いくかも」のほかに、同じ「いー」系統の「いつ」(何時)+「も」はあったが、この表現は自由選択の全称量詞であった。¹¹

- (61) 以都母々々々 於母加古比須々 (万葉集 20, 4386)
itumo itumo omo ga kwopi susu
 いつでもいつでも母が思慕 しずつ
 「いつでも母はいとしいと思いながら」

平安時代に入ると、上のような不定詞+「も」の疊語が否定文に現れる例がある。

- (62) ...よみたまひければ、たれもたれも返しはせで(大和物語 950 頃)
 「...お読みなつたので、誰も誰も返歌しないで」

同時に、不定詞+一般名詞+「も」の否定表現が現れる。

- (63) a. かくれどもくるしけれど、なにごともおもほえず.
 (土佐日記 935 頃)
 b. ただいまはなにごころもなきに (蜻蛉日記康保元年 964)

しかし、10世紀には不定詞+「も」での否定表現はまだ見られない。1節の(5)と(6)で見たように、上代語では同じような一般名詞が否定極性項目の機能を果たした。

¹¹ 「いつも」は「万葉集」に6例あるが、そのなか4例「いつもいつも」といった、疊語□の形である。□

- (64) 己許呂奈久 佐刀乃美奈可尔 安敞流世奈
(万葉集 14, 3463)

kokoro naku satwo no minaka ni apyeru sena
思慮なく 里の真ん中 に 会っている兄
「何の思慮もなく里の真ん中で会ったあなた」

(5), (6), (64) は言語類型論的に広く見られる一般名詞からなる不定表現のパターンである (Haspelmath (1997: 27-29)). このパターンに現れる一般名詞は尺度 (scale) の最低単位を表すものである。(6) でわかるように、上代語にはすでに尺度フォーカス助詞「も」がこれらの一般名詞に付く可能性はあったが、(5) や (64) でわかるように、「も」が付かなくても、単独の一般名詞で尺度の最低単位を表すことができる。

ところが、(63) の不定詞＋一般名詞のパターンになると「も」が義務的になる。(63b) の「なにごころもなきに」から「も」をはずした否定極性表現は日本語史にはない。日本語史における否定極性表現の発達はおおよそ次の(65) のように示される。

- (65) a. 一般名詞 (ひと, もの, こと, こころ) (+も) (上代語から)
b. 不定詞＋一般名詞＋も (「なにごころも」など) (中古語から)
c. 不定詞＋も (中世以後)

日本語史における否定極性表現の発達においては、(65a) から (b) への変化がもっとも大きな変遷であると思われる。起源的には、一般名詞＋「も」に不定詞が加わるようになるという変化は、(61) のような全称量詞との類推であったのかしれないが、将来の研究を待たねばならない。

4. 結語

本稿では、古代日本語と現代日本語の否定構造をめぐる歴史的変化をいくつか検討してきた。もっとも大きな変化は上代日本語と中世 (平安時代) の言語に起きた。大きく分けて、その変化は否定構造の主要部前位性の損失と不定詞＋「も」を含む否定極性表現の発生である。



参考文献

- Aldridge, E. (2007) “Short *wh*-movement in Old Japanese,” paper given at the 17th JK Linguistics Conference, UCLA, 2007.11.12.
- Comrie, B. (1967) *Aspect: An Introduction to the Study of Verbal Aspect and Related Problems*, Cambridge University Press, Cambridge.
- 土井忠生・森田武・長南実(編訳) (1980) 『邦訳日葡辞書』岩波書店, 東京.
- Dryer, M. (1988) “Universals of Negative Position,” *Studies in Syntactic Typology*, ed. by M. Hammond, E. Moravcsik and J. Wirth, 93–124, John Benjamins, Amsterdam.
- Dryer, M. (1992) “The Greenbergian Word Order Correlations,” *Language* 68.1, 81–138.
- Haegemann, L. and R. Zanuttini (1991) “Negative Heads and the Neg Criterion,” *The Linguistic Review* 8, 233–251.
- Han, C. (2001) “Force, Negation and Imperatives,” *The Linguistic Review* 18, 289–325.
- Horn, L. (1989) *A Natural History of Negation*, University of Chicago Press, Chicago.
- Horn, L. (2000) “Pick a Theory (Not Just Any Theory): Indiscriminatives and the Free-choice Indefinite,” *Negation and Polarity: Syntactic and Semantic Perspectives*, ed. by Laurence R. Horn and Yasuhiko Kato, 147–192, Oxford University Press, Oxford.
- Horn, L. (2002) “Assertoric Inertia and NPI Licensing,” *CLS* 38, Part 2, 58–82.
- Horn, Laurence R. and Yasuhiko Kato, eds. (2000) *Negation and Polarity: Syntactic and Semantic Perspectives*, Oxford University Press, Oxford.
- 菅野宏 (1960) 「古代語助詞「つつ」の周辺」『福島大学学芸学部論集』, 39–61.
- Kataoka, Kiyoko (2008) “Two Types of Neg-sensitive *Numeral 1* in Japanese and Their Implications,” handout for Kin-3 seminar, Department of Linguistics, Kyoto University. <http://ling.bun.kyoto-u.ac.jp/infling/kin3/Kataoka110207.pdf>
- Kato, Yasuhiko (1985) *Negative Sentences in Japanese*, Sophia Linguistica Monograph 19, Sophia University.
- Kato, Yasuhiko (1994) “Negative Polarity and Movement,” *MIT Working Papers in Linguistics* 24, 101–120.
- Kato, Yasuhiko (2002) “Negation in English and Japanese: Some □ (A)symmetries and Their Theoretical Implications,” *Proceedings of the* □

- Sophia Symposium on Negation*, 1-21, Sophia University.
- Kato, Yasuhiko (2002) "Negation in Classical Japanese: A Preliminary Survey," *Sophia Linguistica* 49, 99-119.
- Kato, Yasuhiko (2003) "Negation in Classical Japanese: A Minimalist Perspective," *Empirical and Theoretical Investigations into Language: A Festschrift for Masasu Kajita*, ed. by S. Chiba et al., 314-325, Kaitakusha, Tokyo.
- Kato, Yasuhiko (2009) "Negation in Classical Japanese," *Expression of Negation*, ed. by L. Horn, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Kayne, Richard (1994) *The Antisymmetry of Syntax*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Kurylowicz, Jerzy (1947) "La nature des proces dits analogiques," *Acta Linguistica* 5, 17-34.
- Lehmann, Winfred P. (1978b) "The Great Underlying Ground-plans," *Syntactic Typology: Studies in the Phenomenology of Language*, ed. by Winfred P. Lehmann, 3-55, University of Texas Press, Austin.
- Lehmann, Winfred P., ed. (1978) *Syntactic Typology: Studies in the Phenomenology of Language*, University of Texas Press, Austin.
- 大野晋 (1953) 「日本語の動詞の活用形の起源について」『国語と国文』350, 47-56.
- 澤瀉久孝他 (1967) 『時代別国語辞典』三省堂, 東京.
- Rivero, M. L. (1994) "Negation, Imperatives and Wackernagel Effects," *Rivista di Linguistica*.
- Rivero, M. L. and A. Terzi (1995) "Imperatives, V-movement, and Logical Mood," *Journal of Linguistics* 31, 301-332.
- Ross, J. R. (1969) "Guess Who?" *CLS* 5, 252-286.
- Selkirk, E. (1977) "Some Remarks on Noun Phrase Structure," *Formal Syntax*, ed. by A. Akmajian, P. Culicover and T. Wasow, 225-245, Academic Press, New York.
- Sells, P. (2006) "Interactions of Negative Polarity Items in Korean," *Harvard Studies in Korean Linguistics* 11, 724-737, Harvard University.
- Watanabe, K. (2003) "The Development of Continuous Aspect," *Historical Linguistics* 2003, ed. by M. Fortescue, 301-316, John Benjamins, Amsterdam.
- Watanabe, K. (2008) *Tense and Aspect in Old Japanese: Synchronic, Diachronic, and Typological Perspectives*, Doctoral dissertation, Cornell University. □

- Whitman, John (1999) “Kayne 1994: p. 143, fn. 3,” *The Minimalist Parameter*, ed. by G. Alexandrova, 77–100, John Benjamins, Amsterdam.
- Whitman, John (2005) “Preverbal Negation in Japanese and Korean,” *Handbook of Syntactic Variation*, ed. by G. Cinque and R. Kayne, 880–902, Oxford University Press, Oxford.
- 山田孝雄 (1954) 『奈良朝文法史』宝文堂, 東京.
- Yanagida, Yuko (2005) “Ergativity and Bare Nominals in Early Old Japanese,” paper presented at Workshop on Theoretical East Asian Linguistics, Harvard University.
- 柳田優子 (2007) 「上代語の能格性について」『日本語の主文現象』長谷川信子 (編), 147–188, ひつじ書房, 東京.
- Yanagida, Yuko and John Whitman (2009) “Alignment and Word Order in Old Japanese,” to appear in *Journal of East Asian Linguistics*.